

應劭『風俗通義』窮通篇訳注稿(上)

道家春代

本稿は、後漢應劭『風俗通義』第七、窮通篇の訳注である。

本文には原則として吳樹平『風俗通義校釋』(天津人民出版社、一九八〇年)を用い、王利器『風俗通義校注』(中華書局、一九八一年)、香港中文大學中國文化研究所『風俗通義逐字索引』(香港・商務印書館、一九九六年)、趙泓『風俗通義全訳』(貴州人民出版社、一九九八年)、及び季嘉玲「風俗通義校注」(『臺灣師範大學研究所集刊』第二十一號、一九七七年)を参照した。残念ながら朱季海『風俗通義校箋』(學術書林、一九九六年)、は入手できず、見る事ができなかった。

目次

0 (序)

- 1 (孔子困於陳蔡之間……)
- 2 (孟軻受業於子思……)
- 3 (孫況、齊威・宣王之時……)
- 4 (虞卿、游説之士也……)
- 5 (孟嘗君逐於齊……)
- 6 (韓信常從南昌亭長食……)

(下)に続く

0 (序)

易稱「懸象著明、莫大乎日月(1)」。然時有昏晦。詩美「滔滔江漢、南北之紀(2)」。然時有壅滯。論語「固天縱之(3)」、莫盛於聖。然時有困否。日月不失其體、故蔽而復明。江漢不

失其源、故窮而復通。聖人不失其德、故廢而復興。非唯聖人俾爾亶厚(4)、夫有恆者(5)亦允臻矣(6)。是故君子厄窮而不閔、勞辱而不苟(7)、樂天知命(8)、無怨尤焉(9)。故錄先否後喜(10)曰窮通也。

〔注〕

(1) 『易』繫辭上「縣象著明、莫大乎日月。」

(2) 『詩經』小雅四月「滔滔江漢、南國之紀。」毛傳「滔滔大水貌、其神足以綱紀一方。」鄭箋「江也漢也、南國之大水、紀理衆川、使不離滯。」

(3) 『論語』子罕「大宰問於子貢曰『夫子聖者與、何其多能也。』子貢曰『固天縱之將聖、又多能也。』」

(4) 『詩經』小雅天保「俾爾亶厚、何福不除。」毛傳「俾使也。單信也。或曰單厚也。除開也。」『潛夫論』慎微「詩曰『天保定辭、亦孔之固。俾爾亶厚、何福不除。俾爾多益、以莫不庶。』蓋此言也、言天保佑王者、定其性命、甚堅固也。使汝信厚、何不治。而多益之、甚庶衆焉。」

(5) 『論語』述而「子曰『善人吾不得而見之矣。得見有恆者、斯可矣。亡而爲有、虛而爲盈、約而爲泰、難乎有恆矣。』」

(6) 『周禮』考工記「其銘曰、時文思索、允臻其極。」鄭玄注「允信

也、臻至也。」

(7) 『孟子』公孫丑上「柳下惠不羞汚君、不卑小官、進不隱賢、必以其道、遺佚而不怨、阨窮而不憫。」『韓詩外傳』一「孔子曰『富而可求、雖執鞭之士、吾亦爲之。故阨窮而不憫、榮辱而不苟。然後能有致也。』」

(8) 繫辭上「樂天知命、故不憂。」

(9) 『論語』憲問「子曰『莫我知也夫。』子貢曰『何爲其莫知子也。』子曰『不怨天、不尤人。下學而上達、知我者其天乎。』」

(10) 『易』否「上九、傾否、先否後喜。」王弼注「先傾後通、故後喜也。始以傾爲否、後得通乃喜。」

〔訳〕

『易』は「天にかかる輝くものの中で日月ほど大きいものはない」と日月を称えるが、日食月食があり暗くなる時もある。小雅「四月」の詩には「滔滔と流れる長江と漢水は、南北の諸川が注ぎ込む大河である」と長江と漢水を賞めるが、両河も時には水が涸れ流れが滞ることもある。『論語』に云うように孔子は「天が生まれながらにして許した聖人」でこれ以上の人物はいないが、時には困窮に陥ることもあった。しかし、日月は食の時も本体を失ってはいないので、一時的に蔽われ

てもまた輝きを取り戻す。長江と漢水は水源を失ったわけではないので、流れが滞ってもまた流れ出す。聖人はその徳を失ったわけではないので、地位を失ってもまた復活する。とはいへ、ただ聖人だけが天の信頼を厚くし福に恵まれるのではない。揺るぎない心を持っている者にも信頼が集まるのである。このために君子は窮地に陥っても憂えず、栄光や屈辱に拘らず、天命を知って楽しみ、天や他人のせいにして怨んだりしない。そこで先に困難に遇い後に喜びを得た例を収録し、「窮通」と名付ける。

1 (孔子困於陳蔡之間……)

孔子困於陳蔡之間(1)、七日不嘗粒、藜羹不糝(2)、而猶絃琴於室。顏回釋菜於戶外(3)、子路子貢相與言曰「夫子逐於魯、削迹於衛(4)、拔樹於宋(5)、今復見厄於此。殺夫子者無罪、籊夫子者不禁(6)、夫子絃歌鼓舞、未嘗絕音。蓋君子之無恥也、若此乎。」顏淵無以對、以告孔子。孔子恬然推琴、喟然而嘆曰「由與賜小人也。召、吾語之。」子路與子貢入、子路(7)曰「如此可謂窮矣。」夫子曰「由(8)、是何言也。君子

通於道之謂通、窮於道之謂窮。今丘抱仁義之道、以遭亂世之患、其何窮之爲。故内省而不疚於道(9)、臨難而不失其德。

大寒既至、霜雪既降、吾是以知松柏之茂也(10)。昔者桓公得之莒(11)、晉文公得之曹(12)、越得之會稽(13)、陳蔡之厄、於丘其幸乎。」(14)自衛反魯、刪詩書、定禮樂(15)、制春秋之義(16)、著素王之法(17)、復相定公、會于夾谷、昭舊以正其禮、抗辭以拒其侮、齊人謝過、來歸鄆・讜・龜陰之田焉(18)。

〔注〕

(1) 冒頭から「吾是以知松柏之茂也」まで、『呂氏春秋』慎人、『莊子』讓王にほぼ同じ文が見える。「困」、『呂氏春秋』『莊子』ともに「窮」に作る。『論語』衛靈公「衛靈公問陳於孔子。孔子對曰「俎豆之事則嘗聞之矣、軍旅之事未之學也。』明日遂行、在陳絕糧。從者病莫能與。子路愠見曰『君子亦有窮乎。』」子曰『君子固窮、小人窮斯濫矣。』」『史記』孔子世家「孔子遷于蔡三歲、吳伐陳。楚救陳、軍于城父。聞孔子在陳蔡之間、楚使人聘孔子。孔子將往拜禮、陳蔡大夫謀曰『孔子賢者、所刺譏皆中諸侯之疾。今者久留陳蔡之間、諸大夫所設行皆非仲尼之意。今楚大國也、來聘孔子、孔子用於楚、則陳蔡用事大夫危矣。』於是乃相與發徒役圍孔子於野。不得行、絕糧。從者病、莫能興。孔子講誦弦歌不衰。子

路愷見曰『君子有窮乎。』孔子曰『君子固窮、小人窮斯濫矣。』

これ以下孔子世家の師弟の問答は全く異なる。

(2) 『禮記』王制「西方曰戎、被髮衣皮、有不粒食者矣。北方曰狄、衣羽毛穴居、有不粒食者矣。」鄭注「不粒食、地氣寒、少五穀。」

『說文解字』七上「糲、以米和羹也。…一曰粒也。…糲、古文糲。」段注「古之羹、必和以米。」

(3) 「釋」、「呂氏春秋』『莊子』ともに「擇」に作る。吳樹平、王利器ともに、「釋」「擇」の二字は古代通用したという。

(4) 孔子世家「孔子遂適衛、主於子路妻兄顔濁鄒家。…居頃之、或譖孔子於衛靈公。靈公使公孫余假一出入。孔子恐獲罪焉、居十月、去衛。」

(5) 孔子世家「孔子去曹適宋、與弟子習禮大樹下。宋司馬桓魋欲殺孔子、拔其樹。孔子去。弟子曰『可以速矣。』」孔子曰『天生德於予、桓魋其如予何。』『論語』述而「子曰『天生德於予、桓魋其如予何。』」

(6) 「籍」、「呂氏春秋』『莊子』ともに「藉」に作る。『呂氏春秋』高誘注「藉猶辱也。」

(7) 「子路」、「呂氏春秋」は「子貢」に作る。

(8) 「由」、「呂氏春秋』『莊子』に無し。

(9) 『論語』顔淵「司馬牛問君子。子曰『君子不憂不懼。』」曰『不憂不懼。斯謂之君子已乎。』子曰『內省不疚、夫何憂何懼。』

(10) 『論語』子罕「子曰『歲寒、然後知松栢之後彫也。』」

(11) 『史記』齊太公世家「初、襄公之醉殺魯桓公、通其夫人、殺誅數不當、淫於婦人、數欺大臣、羣弟恐禍及、故次弟糾奔魯。其母魯女也。管仲・召忽傅之。次弟小白奔莒、鮑叔傅之。」襄公の從兄弟公孫無知が襄公を弑して自立し、さらに無知が殺されると小白は莒に帰り、立って桓公となった。

(12) 『史記』晉世家「晉文公重耳、晉獻公之子也。…獻公十三年、以驪姬故、重耳備蒲城守秦。獻公二十一年、獻公殺太子申生、驪姬讒之、恐、不辭獻公而守蒲城。獻公二十二年、獻公使宦者履鞮趣殺重耳。重耳踰垣、宦者逐斬其衣袪。重耳遂奔狄。…重耳居狄凡十二年而去。…過曹、曹共公不禮、欲觀重耳駢脅。曹大夫釐負羈曰『晉公子賢、又同姓、窮來過我、奈何不禮。』共公不從其謀。負羈乃私遺重耳食、置璧其下。重耳受其食、還其璧。去、過宋。」その後重耳は、楚と秦を経て晋に帰り、立って文公となった。

(13) 『史記』越王句踐世家「三年、句踐聞吳王夫差日夜勒兵、且以報越、越欲先吳未發往伐之。范蠡諫曰『不可。…』越王曰『吾已

決之矣。』遂興師。吳王聞之、悉發精兵擊越、敗之夫椒。越王乃以餘兵五千人保棲於會稽。吳王追而圍之。：：句踐：：乃令大夫施行成於吳。：：吳王將許之。子胥進諫：：吳王弗聽、卒赦越、罷兵而歸。句踐之困會稽也、喟然嘆曰『吾終於此乎。』種曰『湯繫夏臺、文王囚羑里、晉重耳奔翟、齊小白奔莒、其卒王霸。由是觀之、何遽不爲福乎。』その後句踐は臥薪嘗胆の甲斐あつて吳を破り、江淮の東を攻略し霸王と号した。『呂氏春秋』高誘注「齊桓公遭無知之亂、出奔莒、文公遇麗姬之讒、出過曹、越王句踐與吳戰而敗、棲於會稽之山、卒皆享國、克復其恥、爲霸王、故曰得之。」昔者桓公得之莒」以下三句、『莊子』には無い。

(14) 『呂氏春秋』はこの下「孔子烈然返瑟而弦。子路抗然執干而舞。子貢曰『吾不知天之高也、不知地之下也。』古之得道者、窮亦樂、達亦樂。所樂非窮達也、道得於此、則窮達一也。爲寒暑風雨之序矣。故許由虞乎潁陽、而共伯得乎共首」と続ける。『莊子』もほぼ同じ。

(15) 子罕「子曰、吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。」孔子世家「孔子之時、周室微而禮樂廢、詩書缺。追迹三代之禮、序書傳、上紀唐虞之際、下至秦繆、編次其事。：：故書傳、禮記自孔氏。孔子語魯大師『：：吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。』古者

詩三千餘篇、及至孔子、去其重、取可施於禮義、上采契后稷、中述殷周之盛、至幽厲之缺、始於衽席、：：三百五篇孔子皆弦歌之、以求合韶武雅頌之音。禮樂自此可得而述、以備王道、成六藝。」

(16) 孔子世家「子曰『弗乎弗乎、君子病沒世而名不稱焉。吾道不行矣、吾何以自見於後世哉。』乃因史記作春秋、上至隱公、下訖哀公十四年、十二公。據魯、親周、故殷、運之三代。約其文辭而指博。故吳楚之君自稱王、而春秋貶之曰子。踐土之會實召周天子、而春秋諱之曰天王狩於河陽、推此類以繩當世。貶損之義、後有王者舉而開之。春秋之義行、則天下亂臣賊子懼焉。」

(17) 『漢書』董仲舒傳「孔子作春秋、先正王而繫萬事、見素王之文焉。」(18) 『春秋左氏傳』定公十年「春、及齊平。夏、公會齊侯于祝其、實夾谷。孔丘相。黎彌言於齊侯曰『孔丘知禮而無勇。若使萊人以兵劫魯侯、必得志焉。』齊侯從之。孔丘以公退曰『士兵之。兩君合好、而裔夷之俘以兵亂之。非齊君所以命諸侯也。裔不謀夏、夷不亂華、俘不干盟、兵不偪好。於神不祥、於德爲愆義、於人爲失禮、君必不然。』齊侯聞之遽辟之。將盟、齊人加於載書曰『齊師出竟、而不以甲車三百乘從我者、有如此盟。』孔丘使茲無還揖對曰『而不反我汶陽之田、吾以共命者、亦如之。』齊侯將享公。孔丘謂梁丘據曰『齊魯之故、吾子何不聞焉。事既成矣、而又享之、是勤執

事也。且犧象不出門、嘉樂不野合。饗而既具、是棄禮也。若其不具、用秕稗也。用秕稗君辱、棄禮名惡。子盍圖之。夫享所以昭德也。不昭不如、其已也。』乃不果享。齊人來歸鄆・讎・龜陰之田。」

〔訳〕

孔子は陳と蔡の国境あたりで包囲されて困窮し、七日間穀物を口にできず、あかざのスープに米粒を混ぜることもできなかったが、なお居室で琴を奏でていた。顔回が戸外で野草をより分けていると、子路と子貢が話しているのが聞こえた。

「先生は魯国を逐われ、衛国で危ない目に遭って追い出され、宋国では木の下で礼の練習していると木を引っこ抜かれて逃げ出し、今またここで災難に遭っている。先生を殺そうとする者は罪に問われず、先生を侮辱する者はそれを制止されない。それなのに先生はずっと琴を弾いて歌って舞うばかり。まあ君子はこんなにも恥を知らない者なのだろうか。」顔淵はそれに対して何も言わず、中に入って先生に報告した。孔子は静かに琴を前に押しだし、ため息をついて云った、「由と賜は小人だなあ。こちらに呼びなさい。私が話をしよう。」子路と子貢が入室し、子路が云った、「こういう事態を窮地とすべきでしょう。」先生は云った、「由よ、何を言うんだね。君

子というものは、踏み行うべき道を悟り通じることを通とい、進むべき道に迷って窮することを窮というのだよ。今私には仁義の道をしっかりと抱いているので、道にはずれた乱世の難に遭遇しているだけだ。何も窮してなどいないのだ。だからこそ心中を省みて道に疚しいことなどなく、困難に当たっても徳を失わずにいられるのだ。極寒が到来し霜雪が降り、落葉の季節になって我々はやつと松やひのきが寒さに耐えて葉を茂らせているのに気づく。昔、斉の桓公は莒への亡命を経て斉君の地位を得、晋の文公は父の愛姫の讒言を逃れて国を出て、曹などの諸国を巡った後に晋君となり、越王句踐は会稽山の恥を雪いで宿敵呉に打ち勝ち、この三者は覇者となることができた。この陳蔡での災厄は、むしろ私の幸いとなるだろう。」

孔子は衛から魯に帰った後、詩経と書経を編集整理し、礼樂の制を整え、春秋を著して正義を明らかにし、素王としての手本を示した。また孔子は魯の定公十年、定公の相として夾谷での斉侯との会合に参加し、過去の例を明らかにして、会合での礼を斉に守らせ、斉が定公を侮辱しようとするのを厳しい言葉でやめさせた。その結果、斉は謝罪し、占領して

いた鄆・讎・龜陰の田土を返還してきた。

2 (孟軻受業於子思・：)

孟軻受業於子思(1)、既通游於諸侯、所言皆以爲迂遠而闕於事情、然終不屈道趣舍(2)、枉尺以直尋(3)。嘗仕於齊、位至卿(4)、後不能用。孟子去齊(5)、尹士(6)曰「不識王之不可以爲湯武、則是不明也。識其不可、然且至、則是干祿也(7)。千里而見王、不遇故去、三宿而後出晝、是何濡滯也(8)。」軻曰「夫尹士烏知予哉。千里而見王、是予所欲也。不遇故去、豈予所欲哉。予不得已也。予三宿而出晝、於予心猶以爲速、王庶幾改諸。王如改之、則必反予(9)。夫出晝、而王不予追也、予然後浩然有歸志(10)。」

魯平公駕(11)、將見孟子(12)、嬖人(13)臧倉謂曰「何哉、君所謂輕身以先於匹夫者。以爲賢乎。」樂正子曰「克告於君(14)、君將爲來見也。嬖人有臧倉者沮君、君是以不果。」曰「行、或使之、止、或尼之。行止、非人之所能也。吾不遇於魯侯、天也。臧氏之子、焉能使予不遇哉(15)。」

又絶糧於鄒薛、困殆甚(16)、退與萬章之徒序詩書仲尼之意、

作書中外十一篇(17)、以爲「聖王不作(18)、諸侯恣行、處士橫議(19)、楊朱墨翟之言盈於天下。天下之言不歸楊、則歸墨。

楊氏爲我、是無君也。墨氏兼愛、是無父也。無父無君、是禽獸也。楊墨之道不息、孔子之道不著、是邪說誣民、充塞仁義也。仁義充塞、則率獸食人、人將相食也。吾爲此懼、閑先王之道(20)、距楊墨、放淫辭、正人心、熄邪說、以承三聖者(21)。予豈好辯哉。予不得已也。」梁惠王復聘請之、以爲上卿。

〔注〕

(1)『史記』孟子荀卿列傳「孟軻、騷人也。受業子思之門人。道既通、游事齊宣王、宣王不能用。適梁、梁惠王不果所言、則見以爲迂遠而闕於事情。」孔子世家「孔子生鯉、字伯魚。伯魚年五十、先孔子死。伯魚生伋、字子思、年六十二。嘗困於宋。子思作中庸。『漢書』藝文志「孟子十一篇。名軻、鄆人、子思弟子、有列傳。」吳樹平・王利器ともに、孔子卒年と孟子生年及び活動期との間は開きすぎていて、孔子の孫子思の直接の弟子ではありえないので、門人から学業を受けたという『史記』の説を是とする。

(2)「趣舍」は取捨。

(3)『孟子』滕文公下「陳代曰『不見諸侯、宜若小然。今一見之、大則以王、小則以霸。且志曰枉尺而直尋、宜若可爲也。』孟子曰『：

且夫枉尺而直尋者、以利言也。如以利、則枉尋直尺而利、亦可爲與。』一尋は八尺。

(4) 『孟子』公孫丑下「孟子爲卿於齊、出弔於滕。」

(5) 公孫丑下「孟子去齊、尹士語人曰『不識王之不可以爲湯武、則是不明也。識其不可、然且至、則是干澤也。千里而見王、不遇故去、三宿而後出畫、是何濡滯也。士則茲不悅。』高士以告。曰『夫尹士惡知予哉。千里而見王、是予所欲也。不遇故去、豈予所欲哉。予不得已也。予三宿而出畫、於予心猶以爲速、王庶幾改之。王如改諸、則必反予。夫出畫、而王不予追也、予然後浩然有歸志。』」

(6) 『孟子』趙岐注「尹士、齊人也。」

(7) 趙岐注「干求也。澤祿也。」

(8) 趙岐注「濡滯淹久也。既去、近留於畫三日、怪其淹久。」

(9) 趙岐注「我自謂行速疾矣。冀王庶幾能反覆、招還我矣。」

(10) 趙岐注「浩然、心浩浩有遠志也。」

(11) 『孟子』梁惠王下「魯平公將出、嬖人臧倉者請曰『他日君出、則必命有司所之。今乘輿已駕矣、有司未知所之。敢請。』公曰『將見孟子。』曰『何哉、君所爲輕身以先於匹夫者。以爲賢乎。禮義由賢者出、而孟子之後喪踰前喪。君無見焉。』公曰『諾。』樂正子入見曰『君奚爲不見孟軻也。』曰『或告寡人曰孟子之後喪踰前喪。

是以不往見也。』曰『何哉、君所謂踰者、前以士、後以大夫、前以三鼎、而後以五鼎與。』曰『否、謂棺槨衣衾之美也。』曰『非所謂踰也、貧富不同也。』樂正子見孟子曰『克告於君、君爲來見也。嬖人有臧倉者沮君、君是以不果來也。』曰『行、或使之、止、或尼之。行止、非人之所能也。吾之不遇魯侯、天也。臧氏之子、焉能使予不遇哉。』

(12) 趙岐注「平公敬孟子有德、不敢請召、將往就見之。」

(13) 趙岐注「嬖人、愛幸小人也。」

(14) 趙岐注「樂正姓也、子通稱、孟子弟子也。爲魯臣。問公何爲不見見孟軻也。克樂正子名也。」

(15) 趙岐注「尼止也。孟子之意、以爲魯侯欲行、天使之矣。及其欲止、天令嬖人止之耳。行止天意、非人所能爲也。：：臧氏小子、何能使我不遇哉。」

(16) 孟子荀卿列傳「騶衍」游諸侯見尊禮如此、豈與仲尼菜色陳蔡、孟軻困於齊梁同乎哉。」公孫丑下「(弟子)陳臻に、齊君に贈られた金は受け取らなかつたのに、宋君と薛君から贈られた金を受け取つたことを問われて) 孟子曰：：當在薛也、予有戒心。辭曰聞戒。故爲兵餽之、予何爲不受。」趙岐注「戒、有戒備不虞之心也。時有惡人欲害孟子。孟子戒備。」

(17) 孟子荀卿列傳「退而與萬章之徒序詩書、述仲尼之意、作孟子七

篇。」藝文志「孟子十一篇。」趙岐孟子題辭「於是退而論集所與高第弟子公孫丑萬章之徒、難疑答問、又自撰其法度之言、著書七篇二百六十一章三萬四千六百八十五字。……又有外書四篇、性善・辯文・說孝經・爲正。其文不能弘深、不與內篇相似、似非孟子本真、後世依放而託之者也。」

(18) 滕文公下「聖王不作、諸侯放恣、處士橫議、楊朱墨翟之言盈天下。天下之言不歸楊、則歸墨。楊氏爲我、是無君也。墨氏兼愛、是無父也。無父無君、是禽獸也。……楊墨之道不息、孔子之道不著、是邪說誣民、充塞仁義也。仁義充塞、則率獸食人、人將相食。吾爲此懼、閑先聖之道、距楊墨、放淫辭、邪說者不得作、……昔者禹抑洪水而天下平、周公兼夷狄驅猛獸、而百姓寧、孔子成春秋、而亂臣賊子懼。……我亦欲正人心、息邪說、距詖行、放淫辭、以承三聖者。豈好辯哉。予不得已也。能言距楊墨者、聖人之徒也。」

(19) 『漢書』異姓諸侯王表「秦既稱帝、患周之敗、以爲起於處士橫議、諸侯力爭、四夷交侵、以弱見奪。」師古曰「處士謂不官於朝而居家者也。」

(20) 趙岐注「閑習也。」

(21) 「三聖」は禹・周公・孔子。

〔訳〕

孟軻は學業を孔子の孫である子思（の門人）より教授された。學業が成り仁義の道に通じた後は、諸侯のもとを巡って説いたが、彼の説は諸侯たち皆に迂遠で現実に疎いと見なされた。しかし最後まで、道を曲げて相手に合わせたり、「一尺を枉げて八尺を真つ直ぐにする」ようなことはしなかった。

かつて齊に仕えて卿の地位を得たこともあったが、後に用いられなくなった。孟子は齊を去った。そのとき尹子というものが「わが齊王が殷の湯王や周の武王のような聖王にはなれないことを知らなかったとすれば、孟軻は見る目がないということだ。なれないことを知っていたにもかかわらず齊に仕えたのなら、それは俸禄を求めてやってきたにすぎない。千里の道をはるばる王のもとにやってきて、意見が合わないから去るといふのに、都近くの昼の町に三日も泊まってから出発するなんて、なんとぐずぐず未練がましいことだ」と云った。それを耳にした孟軻は云った、「そもそも尹士ごときに私のことがわかるものか。千里はるばる齊王のもとに行つたのは、私が行きたかったからだ。合わないから去るといふのは、私が望んだことではない。やむを得ず去つたのだ。私が三泊

してから昼を出発したのは、私にいわせればまだ早いほうなのだ。私は王が考えを改めてくれるのを願っていた。もし改めればきっと私を呼び返すだろう。しかし昼の町を出ても王は私を追わなかった。だから私はすっぱりと帰る気持ちになったのだ。」

魯の平公が車を用意して孟子に会いに行こうとしていると、王のお気に入りの近習の臧倉というものがそれを止めた。「何ということ。王様が御身を軽んじて一平民に自ら会いにお出ましとは。孟軻を賢人と思っておられるのですか。」孟子の弟子で平公に仕えている樂正子がこのことを孟子に報告した。「私克が王様に先生のことを申し上げたところ、王様は先生に会いに来られようとなさいました。しかし近習の臧倉という者が王様を止めたので、取りやめになりました。」孟子は云った。「行くも止まるも何かがそうさせるのです。人の力でそうさせることはできません。私が魯の王様に会えないのも天のお計らいです。臧氏のこわっぱなどに私が王様に会えなくさせるようなことはできません。」

又孟子は鄒と薛の国境あたりで食糧が絶たれ、たいそう困窮した。引退して弟子の万章らと詩経・書経・孔子の思想に

ついて問答し、本篇外篇併せて十一篇の著作をし、次のように主張した。「聖王は現れず、諸侯は思うままに行動し、在野の士が勝手気ままに議論し、楊朱・墨翟の言が天下に満ちている。天下の言論は、楊氏かまたは墨氏ばかりをもてはやしている。楊氏はすべては自分の為という個人主義で、主君を無視しているし、墨氏は無差別の愛を説く兼愛主義で、父を無視している。

父も主君も無いのは禽獣である。楊氏と墨氏の道が根絶されなければ、孔子の道は顕れない。邪説が民を惑わせ、仁義の道を閉塞させているのである。仁義の道が閉塞すれば野獣がこぞつて人を食らい、人が人を食らうようになるだろう。私はそれを懼れ、先王が開かれた道を習い、楊氏墨氏を防ぎ止め、勝手気ままな議論を放逐し、人心を正しく導き、邪説を終息させ、禹・周公・孔子という三人の聖人の道を継承するのである。私は弁論を好む者であろうか。いや私はこれらを撲滅するためにやむを得ず弁論しているのである。」

梁の恵王は復た孟子を招聘し上卿にした。

3 (孫況、齊威・宣王之時：)

孫況(1)、齊威・宣王之時、聚天下賢士於稷下、尊寵之。

若鄒衍・田駢・淳于髡之屬甚衆、號曰列大夫、皆世所稱(2)、

咸作書刺世(3)。是時孫卿有秀才、年十五始來遊學(4)、諸

子之事皆以爲非先王之法也。孫卿善爲詩禮易春秋。至襄王時、

而孫卿最爲老師。齊尚循列大夫之缺、而孫卿三爲祭酒焉(5)。

齊人或讒孫卿、乃適楚、楚相春申君以爲蘭陵令(6)。人或謂

春申君「湯以七十里、文王以百里(7)。孫卿、賢者也、今與

之百里地、楚其危乎。」春申君謝之、孫卿去之、游趙(8)、應

聘於秦(9)。

是時七國交争、尚於權詐、而孫卿守禮義、貴術籍。雖見窮

擯、而猶不黜其志。作書數十篇(10)、疾濁世之政、國亂君危

相屬、不遵大道而營乎巫祝、信祿祥(11)。蘇秦・張儀以邪道

說諸侯、以大貴顯。隨而笑之曰「夫不以其道進者、必不以其

道士(12)。」又小五伯、以爲仲尼之門羞稱其功(13)。

後客或謂春申君(14)曰「伊尹去夏入殷、殷王而夏衰。管仲

去魯入齊、魯弱而齊疆。故賢者所在、君尊國安。今孫況、天

下賢人、所去之國、其不安乎。」春申君使請孫況、況遺春申君

書、刺楚國、因爲歌賦以遺春申君(15)、因不得已乃行、復爲
蘭陵令焉。

〔注〕

(1)『史記』孟子荀卿列傳「荀卿、趙人。年五十始來游學於齊。」索

隱「名況。卿者、時人相尊而號爲卿也。仕齊爲祭酒、仕楚爲蘭陵

令。後亦謂之孫卿子者、避漢宣帝諱改也。」この項の全文は、ほ

ぼ劉向の「荀卿新書敘錄」に沿っているが、段落の順序が前後し

ている箇所がいくつかある。以下に初めと終わりの一部を省いて

全文を載せる。「孫卿、趙人、名況。方齊宣王威王之時、聚天下

賢士於稷下、尊寵之。若鄒衍・田駢・淳于髡之屬甚衆、號曰列大

夫、皆世所稱、咸作書刺世。是時孫卿有秀才、年五十始來游學、

諸子之事皆以爲非先王之法也。孫卿善爲詩書禮易春秋。至齊襄王

時、孫卿最爲老師。齊尚修列大夫之缺、而孫卿三爲祭酒焉。齊人

或讒孫卿、孫卿乃適楚、楚相春申君以爲蘭陵令。人或謂春申君曰

『湯以七十里、文王以百里。孫卿、賢者也、今與之百里地、楚其

危乎。』春申君謝之、孫卿去之趙。後客或謂春申君曰『伊尹去夏

入殷、殷王而夏亡。管仲去魯入齊、魯弱而齊強。故賢者所在、君

尊國安。今孫卿、天下賢人、所去之國、其不安乎。』春申君使人

聘孫卿、孫卿遺春申君書、刺楚國。因爲歌賦以遺春申君。春申君

恨、復固謝孫卿。孫卿乃行、復爲蘭陵令。春申君死而孫卿廢、因家蘭陵。李斯嘗爲弟子、已而相秦。及韓非號韓子、又浮丘伯、皆受業、爲名儒。孫卿之應聘於諸侯、見秦昭王、昭王方喜戰伐、而孫卿以三王之法說之、及秦相應侯、皆不能用也。至趙、與孫臏議兵趙孝成王前。孫臏爲變詐之兵、孫卿以王兵難之、不能對也。卒不能用。孫卿道守禮義、行應繩墨、安貧賤。孟子者亦大儒、以人之性善、孫卿後孟子百餘年、孫卿以爲人性惡、故作性惡一篇、以非孟子。蘇秦張儀以邪道說諸侯、以大貴顯。孫卿退而笑之曰『夫不以其道進者、必不以其道亡。』至漢興、江都相董仲舒亦大儒、作書美孫卿。孫卿卒不用於世、老於蘭陵。疾濁世之政、亡國亂君相屬、不遂大道而營乎巫祝、信祲祥、鄙儒小拘、如莊周等又滑稽亂俗。於是推儒墨道德之行事、興壞序列、著數萬言、而卒、葬蘭陵。而趙亦有公孫龍爲堅白同異之辭、處子之言、魏有李悝、盡地力之教、楚有尸子·長盧子·芋子、皆著書。然非先王之法也、皆不循孔子之術、惟孟軻孫卿爲能尊仲尼。蘭陵多善爲學、蓋以孫卿也。長老至今稱之曰『蘭陵人喜字爲卿、蓋以法孫卿也。』孟子孫卿董先生皆小五伯、以爲仲尼之門、五尺童子皆羞稱五伯。……」

(2) 孟子荀卿列傳「於是齊王嘉之、自如淳于髡以下、皆命曰列大夫、爲開第康莊之衢、高門大屋、尊寵之。覽天下諸侯賓客、言齊能致

天下賢士也。」『史記』田敬仲完世家「宣王喜文學游說之士、自如鄒衍·淳于髡·田駢·接予·慎到·環淵之徒七十六人、皆賜列第、爲上大夫、不治而議論。是以齊稷下學士復盛、且數百千人。」索隱「劉向別錄曰『齊有稷門、齊城門也。談說之士期會於其下。』齊地記曰『齊城西門側、系水左右有講室、趾往往存焉。』蓋因側系水出、故曰稷門、古側稷音相近耳。又虞喜曰『齊有稷山、立館其下以待游士』、亦異說也。」

(3) 孟子荀卿列傳「自騶衍與齊之稷下先生、如淳于髡·慎到·環淵·接子·田駢·騶爽之徒、各著書言治亂之事、以干世主、豈可勝道哉。」

(4) 『史記』及『劉向「敘錄」』は「年五十」とする。注(1)参照。

(5) 孟子荀卿列傳「齊襄王時、而荀卿最爲老師。齊尚脩列大夫之缺、而荀卿三爲祭酒焉。齊人或譏荀卿、荀卿乃適楚、而春申君以爲蘭陵令。」索隱「按、禮食必祭先、飲酒亦然、必以席中之尊者一人當祭耳。後因以爲官名。故吳王濞爲劉氏祭酒是也。而卿三爲祭酒者、謂荀卿出入前後三度處列大夫康莊之位、而皆爲其所尊、故云三爲祭酒也。」『後漢書』百官志二「博士祭酒一人、六百石。」劉注「胡廣曰官名祭酒、皆一位之元長者也。古禮、賓客得主人饌、則老者一人舉酒以祭於地、舊說以爲示有先。」

(6) 『史記』春申君列傳「春申君者、楚人也、名歇、姓黃氏。游學博

聞、事楚頃襄王。…楚頃襄王卒、太子完立、是爲考烈王。考烈王元年、以黃歇爲相、封爲春申君、賜淮北地十二縣。…春申君相楚八年、爲楚北伐滅魯、以荀卿爲蘭陵令。」

(7) 『孟子』公孫丑上「孟子曰、以力假仁者霸、霸必有大國、以德行

仁者王、王不待大。湯以七十里、文王以百里。」『戰國策』楚四「客說春申君曰『湯以亳、武王以鄆、皆不過百里以有天下。今孫子、天下賢人也。君籍之以百里之勢、臣竊以爲不便。於君何如。』春申君曰『善。』於是使人謝孫子、孫子去之趙。趙以爲上卿。客又說春申君曰『昔伊尹去夏入殷、殷王而夏亡。管仲去魯入齊、魯弱而齊強。故賢者之所在、其君未嘗不尊、國未嘗不榮也。今孫子、天下賢人也、君何辭之。』春申君又曰『善。』於是使人請孫子於趙。孫子爲書謝曰…、因爲賦曰…。」『韓詩外傳』にも同様の話を載せる。

(8) 孟子荀卿列傳は注(5)の引用の後「春申君死而荀卿廢、因家蘭陵」と続け、趙に去ったことを云わない。『荀子』議兵「臨武君與孫卿子議兵於趙孝成王前。」

(9) 『荀子』儒效「秦昭王問孫卿子曰『儒無益於人之國。』」同疆國「應侯問孫卿子曰『入秦何見。』」楊倞注「應侯、秦相范雎、封於應也。」

孟子荀卿列傳「李斯嘗爲弟子、已而相秦。」

(10) 『漢書』藝文志「孫卿子三十三篇。」

(11) 孟子荀卿列傳「荀卿嫉濁世之政、亡國亂君相屬、不遂大道而營於巫祝、信禱祥、鄙儒小拘、如莊周等又滑稽亂俗、於是推儒墨道德之行事、興壞序列、著數萬言而卒。因葬蘭陵。」『漢書』天文志「田氏篡齊、三家分晉、並爲戰國、爭於攻取、兵革遞起、城邑數屠、因以飢饉疾疫愁苦、臣主共憂患、其察禱祥候星氣尤急。」如淳曰「呂氏春秋『荊人鬼、越人禱』、今之巫祝禱祠淫祀之比也。」『呂氏春秋』異寶「荊人畏鬼、越人信禱。」高誘注「言荊人畏鬼神、越人信吉凶之禱祥。」

(12) 「士」、王利器は劉向「敘錄」、盧文弨『拾補』に従い「亡」に作る。これに従う。

(13) 『荀子』仲尼「仲尼之門人、五尺之豎子言羞稱乎五伯。」

(14) この段落、劉向「敘錄」は荀卿が趙に去った後に置いている。『戰國策』『韓詩外傳』も同じ。注(1)(7)参照。
(15) 『戰國策』『韓詩外傳』は書の文と賦を載せている。賦は『荀子』賦篇に収録されている。

〔訳〕

孫況(荀子のこと。以下荀卿という)について。齊は威王

と宣王の時天下の賢士を稷門下の学舎に集め、彼らを尊び鄭重に遇した。騶衍・田駢・淳于髡といった面々が何十人として列大夫と呼ばれた。みな世に名高く、書物を著して当世を批判した。この時、荀卿は秀でた才能を持って、五十歳になつてやつと稷下に遊学し、(儒学以外の)諸子の学問はすべて古の聖王の法に則っていないと批判した。荀卿は詩・礼・易・春秋に通じていた。襄王の時になると、荀卿が最年長の老師となつた。齊は列大夫の欠員があると補充していたが、荀卿は三度祭酒(学舎長)を勤めた。齊の人に荀卿の事を誹謗するものがいたので、荀卿は楚に行った。楚の相春申君は彼を蘭陵県令にした。ところがある人が「殷の湯王は七十里四方、周の文王は百里四方の地しか有していなかったのに徳によつて王業を成就させました。荀卿は賢者です。今彼に蘭陵という百里の地を与えるなら、本体の楚国が危うくなるでしょう」といふと、春申君はそれを聞き入れ、蘭陵県令の任命を取り消した。荀卿は楚を去り、趙に赴き、その後秦の招聘に応じた。

この当時、七大国が抗争しい、権謀術策が重視されていたが、荀卿は礼儀を守り、儒学の書を貴んでいた。困窮した

り退けられたりしてもその意志を変えなかつた。数十篇の書を著作して、濁世の政治がまかり通り、国乱や君主が危機に瀕するという事態が相次ぎ、諸侯が大道を遵守して国を治めるといふ法を取らず、巫祝によつて鬼神に祈つたり、吉凶の予言に頼つたりする状況を批判した。蘇秦や張儀が邪道を諸侯に説いて宰相に迎えられたことを笑い、「そもそも彼らがその邪道によつて出世しなければ、必ずその邪道によつて身を滅ぼすこともなかつたらう」と云つた。又、春秋の五霸を評し、仲尼の門人は彼らの功業を称賛することを羞むる、と考へた。

(荀卿が楚を去つた)後、ある客分が春申君に云つた、「伊尹が夏を去つて殷に迎えられると、殷が王となり夏は衰亡しました。管仲が魯を去り齊に入ると、魯が弱体化し齊が強国となりました。つまり賢者がいれば、君主が尊重され国が安泰になるのです。今荀卿は天下の賢者です。彼に去られた国は不安ではないですか。」春申君は使いを出して荀卿に戻るよう請うた。荀卿は春申君に手紙を送り、楚国を刺し、賦を作つて贈つた。春申君は悔やみ、再度荀卿に深く謝罪した。それでやむなく荀卿は楚に行き、また蘭陵県令となつた。

4 (虞卿、游説之士也……)

虞卿、游説之士也。一見趙孝成王、賜黃金百鎰、白璧一雙。

再見拜爲上卿、故號爲虞卿(1)。其後范雎之仇魏齊(2)亡過平原君(3)、於是秦昭王請平原君、願爲布衣之交、與飲數日

(4)、請曰「周文王得呂尚而以爲太公(5)、齊桓得管夷吾而以爲仲父(6)、今范君亦寡人之叔父也(7)。范君之仇在君之家、願使人取其頭。不然、吾不出君於關。」平原君曰「貴而交

者、爲賤也。富而友者、爲貧也(8)。夫魏齊者、勝之交也。在、固不出、況今又不在臣所乎。」昭王乃遣趙王書曰「范君之

仇魏齊在平原君家(9)、王使人疾持其頭來。不然、吾舉兵而伐趙、又不出王之弟於關。(10)」。趙孝成王乃發卒圍平原君家、

急、魏齊夜亡出、見趙相虞卿。虞卿度趙王終不可説、乃解其印、與魏齊間行、念諸侯莫可以赴急者(11)、乃復走大梁、欲

因信陵以至楚。而信陵君聞之(12)、畏秦、猶與未肯見(13)、

曰「虞卿何如人哉。」時候羸在傍(14)、曰「人固未易知、知人亦未易也。夫虞卿一見趙王(15)、賜白璧一雙、黃金百斤、再

見拜爲上卿、三見平受相印(16)、萬戶侯。當是之時、天下爭

知之。夫魏齊窮困過虞卿、虞卿不敢重爵祿之尊、解相印、捐

萬戶侯而間行、以急士窮而歸公子、公子曰『何如人』、知人固未易也(17)。」信陵君大慚、駕如野迎之。魏齊聞信陵君之初重

見之(18)、大怒而自刎。趙王聞之、卒取其頭與秦、秦乃遣平原君(19)、虞卿遂留於魏。魏趙畏秦、莫復用、困而不得意、

乃著書八篇、號虞氏春秋焉(20)。

〔注〕

(1)『史記』平原君虞卿列傳「虞卿者、游説之士也。躡蹻擔簞、説趙

孝成王。一見賜黃金百鎰、白璧一雙。再見爲趙上卿、故號爲虞卿。」

集解「譙周曰食邑於虞。」

(2)『史記』范雎蔡澤列傳「范雎者、魏人也、字叔。游説諸侯、欲事

魏王、家貧無以自資、乃先事魏中大夫須賈。」須賈が魏の使者と

して齊に行つたとき、范雎も從つた。齊の襄王が范雎を見込んで

贈り物をしたが、范雎は受け取らなかつた。須賈はそれを知り、

范雎が魏の情報を買つたと疑い、魏に帰ると相の魏齊に告げた。

魏齊は激怒し、范雎をむち打たせ辱めた。范雎は死んだふりをし

て逃亡し、張祿と名を変え、秦の昭王の使者として魏に来ていた

王稽の元に身を隠し、王稽とともに秦に入った。秦の昭王に数々

の進言をして重んじられ、応に封じられて応侯となり、秦の相に

任じられた。魏では何も知らず、范雎は死んだと思われていた。須賈が秦に使者としてやってきたとき、応侯范雎は正体を明かし、驚き謝罪する須賈を一旦は許したが、帰国前の送別の宴で辱めた上、「魏に帰ったら魏王に、魏斉の頭を持ってこい、さもないと魏を攻めるぞ、と告げよ」と責めた。

(3) 范雎蔡澤列傳「須賈歸、以告魏齊。魏齊恐、亡走趙、匿平原君所。」平原君虞卿列傳「平原君趙勝者、趙之諸公子也。諸子中勝最賢、喜賓客。賓客蓋至者數千人。平原君相趙惠文王及孝成王、三去相、三復位、封於東武城。」集解「徐廣曰魏公子傳曰趙惠文王弟。」

(4) 范雎蔡澤列傳「秦昭王聞魏齊在平原君所、欲爲范雎必報其仇、乃詳爲好書遺平原君曰『寡人聞君之高義、願與君爲布衣之友、君幸過寡人、寡人願與君爲十日之飲。』平原君畏秦、且以爲然、而入秦見昭王。昭王與平原君飲數日、昭王請平原君曰……」以下『史記』の文は、「周文王得呂尚」から「秦乃遣平原君」までほぼ同文。

(5) 『史記』齊太公世家「呂尚蓋嘗窮困、年老矣。以漁釣奸周西伯。……於是周西伯獵、果遇太公於渭之陽、與語大說、曰『吾先君太公曰當有聖人適周、周以興。子真是邪。吾太公望子久矣。』故

號之曰太公望、載與俱歸、立爲師。」

(6) 『釋名』釋親「父之弟曰仲父。仲中也、位在中也。仲父之弟曰叔父。叔少也。」『荀子』仲尼「夫齊桓公有天下之大節焉、夫孰能亡之。然然見管仲之能足以託國也、是天下之大知也。安忘其怒、出忘其讎、遂立以爲仲父、是天下之大決也。」楊倞注「仲者、夷吾之字、父者、事之如父、故號爲仲父。」

(7) 范雎の字は叔。注(2)参照。

(8) 范雎蔡澤列傳索隱「以言富貴而結交情深者、爲有貧賤之時、不可忘之也。」

(9) 范雎蔡澤列傳、この句の上に「王之弟在秦」有り。

(10) 徐廣の引く魏公子傳によれば、平原君は惠文王の弟であるから、孝成王の叔父になる。注(3)参照。

(11) 「赴急」、范雎蔡澤列傳は「急抵」に作る。

(12) 『史記』魏公子列傳「魏公子無忌者、魏昭王少子而魏安釐王異母弟也。昭王薨、安釐王卽位、封公子爲信陵君。是時范雎亡魏相秦、以怨魏齊故、秦兵圍大梁、破魏華陽下軍、走芒卯。魏王及公子患之。公子爲人仁而下士、士無賢不肖皆謙而禮交之、不敢以其富貴驕士。士以此方數千里爭往歸之、致食客三千人。當是時、諸侯以公子賢、多客、不敢加兵謀魏數十餘年。」信陵君の姉は平原君の

夫人。

(13) 「猶與」、范雎蔡澤列傳は「猶豫」に作る。

(14) 魏公子列傳「魏有隱士曰侯嬴、年七十、家貧、爲大梁夷門監者。

公子聞之、往請、欲厚遺之。……侯生遂爲上客。」

(15) 范雎蔡澤列傳、「一見」の上に「躡屣擔簣」有り。

(16) 「平」、范雎蔡澤列傳「卒」に作る。吳樹平・王利器ともに「卒」

にすべきという。これに従う。

(17) 范雎蔡澤列傳「人固未易知、知人亦未易也。」

(18) 「重」、范雎蔡澤列傳「難」に作る。

(19) 范雎蔡澤列傳「秦昭王乃出平原君歸趙。」

(20) 平原君虞卿列傳「虞卿既以魏齊之故、不重萬戶侯卿相之印、與

魏齊閒行、卒去趙、困於梁。魏齊已死、不得意、乃著書、上採春

秋、下觀近世、曰節義・稱號・揣摩・政謀、凡八篇。以刺譏國家

得失、世傳之曰虞氏春秋。」『漢書』藝文志「虞氏春秋十五篇。虞

卿也。」

〔訳〕

虞卿は遊説の士である。趙の孝成王にお目見えして、一度目に黄金百鎰と白璧一對を賜り、二度目には上卿の地位をい

した范雎が、魏にいたときの仇魏斉に復讐しようとしたので魏斉は魏から逃げて趙の平原君のもとに身を寄せた。すると秦の昭王は范雎のために、平原君に手紙を寄せて「あなたと庶民の交友をしたい」と秦に招き、数日間ともに酒を飲んだ。そして平原君に請うていうには、「周の文王は呂尚を得て太公と呼び、斉の桓公は管仲を得て仲父と呼び、父のように尊びました。今范雎殿は私にとつて叔父です。その范雎殿の仇があなたの家にいます。どうかその頭をもつて来させてください。もしなければ私はあなたを函谷関から出しません。」平原君は答えた、「高位にあるとき交際するのは落ちぶれたときに、富めるときに友となるのは貧窮したときに助け合うためです。その魏斉という者は私の友人です。私の元にいたとしても当然外には出しません。ましてや今私の所にいないのですから出しようがありません。」昭王はすると趙王に手紙を書いて送った。「范雎殿の仇魏斉が平原君の家にいます。王よ、すぐさまその頭をもつて来させない。もしなければ私は兵を挙げて趙を伐ち、さらに王の弟御を函谷関から出しません。」趙の孝成王はすると兵卒を出して平原君の家を嚴重に困らせた。魏斉は夜逃亡し、趙の相虞卿に会いに行つた。虞卿は趙王を

説得することはできないだろうを考え、なんと相の印綬をはずし、隙に乗じて魏斉とともに逃げた。諸侯の中にこの急場に駆け込めるところはないかと考え、また魏に戻り、信陵君に頼って楚へ行こうとした。しかし信陵君は虞卿が頼つて来たと聞くと、秦を恐れ、ぐずぐずして会おうとせず、「虞卿とはどういう人物か」と云った。その時上客の侯嬴が側について云った、「人はなかなか知ってもらうのは容易ではありませんが、人を知るといふのも容易ではありません。この虞卿という者は趙王に一度見えただけで白璧一对と黄金百斤を賜り、二度目に上卿の地位に就き、三度目にはついに相の印綬を受け、万戸侯になった人物です。かの魏斉が秦に追求され困窮して虞卿を頼ると、虞卿は高い爵位俸禄も重視せず、相の印綬を解き、万戸侯も捨てて逃亡したあげく、困り果てて殿さまを頼つて来たのです。それを殿さまは『どういう人物か』とおっしゃいました。人を知るのは全く容易ではありません。せんな。」信陵君は大いに恥じ、車を出して郊外に出迎えた。魏斉は信陵君の腰が当初重かったと聞いて、激怒して自ら首を刎ねた。趙王はそれを聞くと、彼の頭を手に入れて秦に与えた。すると秦は平原君を趙に帰した。虞卿はそのまま魏に

留まつた。魏も趙も秦を恐れ、もう彼を用いなかった。不本意にも困窮した虞卿は八篇の書を著し、『虞氏春秋』と名付けた。

5 (孟嘗君逐於齊…)

孟嘗君逐於齊(1)、見反、譚子迎於澧(2)、曰「君怨於齊大夫乎。」孟嘗君曰「有。」譚子曰「如意則殺之乎。夫富貴、則人爭歸之。貧賤、則人爭去之。此物之必至、而理之固然也、願君勿怨。請以市論、朝而盈焉、夕而虛焉、非朝愛之而夕憎之也、求在故往、亡故去。」孟嘗君曰「謹受命。」(3)於是削所怨者名而已。

〔注〕

(1)『史記』孟嘗君列傳「孟嘗君名文、姓田氏。文之父曰靖郭君田嬰。

…潛王即位。即位三年、而封田嬰於薛。…嬰卒、諡爲靖郭君。

而文果代立於薛、是爲孟嘗君。孟嘗君在薛、招致諸侯賓客及亡人

有罪者、皆歸孟嘗君。孟嘗君舍業厚遇之、以故傾天下之士。食客

數千人、無貴賤一與文等。…齊王惑於秦楚之毀、以爲孟嘗君名

高其主而擅齊國之權、遂廢孟嘗君。諸客見孟嘗君廢、皆去。」そ

の後食客馮驩の計により孟嘗君は齊の相に復帰することができた。

(2) 孟嘗君列傳では「譚子」ではなく、「馮驩」。「戰國策」齊四「孟嘗君逐於齊而復反、譚拾子迎之於境、謂孟嘗君曰『君得無有所怨齊士大夫乎。』孟嘗君曰『然。』『君滿意殺之乎。』孟嘗君曰『然。』譚拾子曰『事有必至、理有固然、君知之乎。』孟嘗君曰『不知。』譚拾子曰『事之必至者、死也。理之固然者、富貴則就之、貧賤則去之。此事之必至、理之固然者、請以市喻。市朝則滿、夕則虛、非朝愛市而夕憎之也、求存故往、亡故去。願君勿怨。』孟嘗君乃取所怨五百牒削去之、不敢以爲言。」

(3) 孟嘗君列傳「孟嘗君太息歎曰『文常好客、遇客無所敢失、食客三千有餘人、先生所知也。客見文一日廢、皆背文而去、莫顧文者。今頼先生得復其位、客亦有何面目復見文乎。如復見文者、必唾其面而大辱之。』馮驩結轡下拜。孟嘗君下車接之、曰『先生爲客謝乎。』馮驩曰『非爲客謝也。爲君之言失。夫物有必至、事有固然、君知之乎。』孟嘗君曰『愚不知所謂也。』曰『生者必有死、物之必至也。富貴多士、貧賤寡友、事之固然也。君獨不見夫趣市朝者乎。明旦、側肩爭門而入、日暮之後、過市朝者掉臂而不顧。非好朝而惡暮、所期物忘其中。今君失位、賓客皆去、不足以怨士而徒絕賓

客之路。願君遇客如故。』孟嘗君再拜曰『敬從命矣。聞先生之言、敢不奉教焉。』

〔訳〕

孟嘗君は齊から追われたが、また齊に帰ることになった。譚子が国境の漣の町まで出迎え、「殿は齊の大夫たちを怨んでおられますか」と尋ねた。孟嘗君は「怨んでおる」と答えた。譚子は云った、「もしそう思っておられるなら、彼らを殺すつもりでしょうか。そもそも富貴になれば人は争つてその人の元に集まり、貧賤になれば争つて去っていくものです。これは物事の必至であり、理の当然です。どうか殿には怨まれませぬように。これを市場に喩えて論じてみます。市場は朝には人が満ちており、夕べにはがらんとしています。人々は朝は市場を愛し、夕べには嫌いになったわけではありません。求める物が朝の市場にはあるので行き、夕べには無くなるので去るだけなのです。」孟嘗君は「謹んで仰せに従おう」と言った。そして怨んでいる人たちの名を書き付けから削り取った。

6 (韓信常從南昌亭長食……)

韓信常從南昌亭長食(1)、數月、亭長妻患之、乃晨早食。

食時信往、不爲具食。信亦知意、遂絕去。釣城下(2)、有一

漂母(3)見信饑、飯之、竟漂數十日。信曰「吾必重報母。」母

怒曰「大丈夫不能自食、吾哀王孫耳(4)、豈望報乎。」淮陰少

年有侮信者(5)、曰「君雖姣麗、好帶長劍、怯耳。能死、刺

我。不能、則出我跨下。」於是信熟視之、俛出跨下、匍匐、一

市人皆笑、以爲信怯。後佐命大漢、功冠天下、封爲楚王(6)。

賜所食母千金(7)、及亭長與百錢、「公、小人也、爲德不竟。」

召辱信之少年以爲中尉(8)、告諸侯將相曰「此人壯士也。方

辱我時、豈不能殺之。殺之無名、故忍至於此也。」

〔注〕

(1)『史記』淮陰侯列傳「淮陰侯韓信者、淮陰人也。始爲布衣時、貧

無行、不得推擇爲吏、又不能治生商賈、常從人寄食飲。人多厭之

者。常數從其下鄉南昌亭長寄食、數月、亭長妻患之、乃晨炊糜食。

食時信往、不爲具食。信亦知其意、怒竟絕去。』『後漢書』百官志

五「亭有亭長、以禁盜賊。本注曰、亭長、主求捕盜賊、承望都尉。」

劉昭注「風俗通曰、漢家因秦、大率十里一亭。亭留也、蓋行旅宿

會之所館。亭史舊名負弩、改爲長、或謂亭父。」

(2) 淮陰侯列傳「信釣於城下、諸母漂、有一母見信飢、飯信、竟漂

數十日。信喜、謂漂母曰『吾必有以重報母。』母怒曰『大丈夫不

能自食、吾哀王孫而進食、豈望報乎。』正義「淮陰城北臨淮水、

昔信去下鄉而釣於此。」

(3) 淮陰侯列傳集解「韋昭曰『以水擊絮爲漂、故曰漂母。』」

(4) 淮陰侯列傳索隱「劉德曰『秦末多失國、言王孫公子、尊之也。』

蘇林亦同。張晏云『字王孫』、非也。」

(5) 淮陰侯列傳「淮陰屠中少年有侮信者、曰『若雖長大、好帶長劍、

中情怯耳。』衆辱之曰『信能死、刺我。不能死、出我跨下。』於是

信孰視之、俛出跨下、蒲伏。一市人皆笑信、以爲怯。」

(6) 淮陰侯列傳「漢王之困固陵、用張良計、召齊王信、遂將兵會垓

下。項羽已破、高祖襲奪齊王軍。漢五年正月、徙齊王信爲楚王、

都下邳。」

(7) 淮陰侯列傳「信至國、召所從食漂母、賜千金。及下鄉南昌亭長、

賜百錢、曰『公、小人也、爲德不卒。』召辱己之少年令出胯下者

以爲楚中尉。告諸將相曰『此壯士也。方辱我時、我寧不能殺之邪。

殺之無名、故忍而就於此。』

(8)『漢書』百官公卿表上「諸侯王、高帝初置、……有太傅輔王、內

史治國民、中尉掌武職、丞相統衆官。」

〔訳〕

韓信はいつも南昌亭の亭長の家で食事をしていたが、それが数ヶ月続くと、亭長の妻はそれを苦にして、早朝に食事を済ませてしまった。いつもの食事時に韓信が亭長の家に行く、食事はもう終わっていて、彼に用意してくれなかった。韓信も妻の意図を理解し、そのまま亭長とは絶交し去った。淮陰の城壁の下の川で釣りをしていると、川で綿布のさらしをしていたおばさんたちの一人が、韓信がひもじそうにしているのを見て食べ物を与え、さらしが終わるまで数十日ずっと与え続けた。韓信が「必ずや厚くお返しをします」というと、おばさんは怒って云った、「りっぱな男だというのに自分で飯が食えない、そんな坊ちゃんが気の毒だったからご飯をあげただけ。お返しなんかいららないよ。」淮陰の市場で若者が韓信を馬鹿にして、「貴君はりっぱな体つきで好んで長剣を脇に差しているが、本当は臆病者だろう。もし死ぬ勇氣があれば私を刺せ、できなければわたしの股下をくぐれ」と云った。すると韓信はまじまじと彼を見てから、地面に這いつくばって股下をくぐった。市場に居合わせた人たちは皆笑い、韓信

が臆病者だと思った。その後韓信は大漢が天命を受けて天下を取るのを助け、その功績は天下第一により、楚王に封じられた。楚国に赴くと、食べ物をくれたおばさんに千金を賜り、南昌の亭長には百錢を与え、「貴方はケチな男だ。私のめんどろを見てくれたのに、最後までやり遂げなかった」と云った。自分を侮辱した若者を召し出して、中尉に取り立ててやり、將軍や大臣たちに「この人は壮士だ。私を侮辱したあの時、私は彼を殺せなかったわけではない。彼を殺しても何の名誉も得られない、だから我慢して今ここにこうしているのだ」と云った。